

No. 8

1986

12月1日発行

萩の郷

発 行 者
下 市 田 区

発行責任者
下 井 武 平

印 刷 者
飯田共同印刷(株)



下市田区では十月十九日(日)
区内三八五名の高齢者を対象
とした敬老会を開催し、永年
の労に感謝するとともに七十
七才・八十八才・九十才以上
の方々に記念品を贈り高寿を
祝った。

また当日は公民館各クラブ
の作品展示会と発表会を併せ
開催し、クラブ活動の成果の
披露と高齢者の日頃の労をねぎらった。

最近の下市田の情勢について

下市田工業団地進出第一号旭松の竣工式典が十一月十八日に行なわれ本格的な操業が開始されました。

第二号の綿半工営の起工式が十一月二十一日現地にて行なわれ、いよいよ建設にかかりました。又より先十一月十九日に東京都西多摩郡に本社のある北星ハウス工業の社長さんが現地を見に来られ、即進出が決定されました。

町道一―二号線につきましては当初車道七米歩道二米で説明がありましたが、県の指導に依り車道が五米に変更になり基本測量が終り近く説明がなされる予定です。悪水路については中学校付近の雨水を大島川に放流する工事と市場付近の排水工事の関連工事とが着工され、また羽根付近の排水二期工事も関係者の御協力です。又竜西線の北沢亮さん前より寺沢元治さん裏付近迄の改良工事の話合いが始まっています。その他道路水路等の改良について

各地区の要望を町へ申請を致しました。

消防関係については公民館の消防施設は消防署の指示に従って整備を完了し高寿館、三区会所については之も消防署の指示に依り高寿館の大広間と作業場を区

二カ年を顧りみて

代議員会長 小林 恵

区民の皆様には御指導とご協力をお願い申し上げて、早くも任期の二年が過ぎようとしています。代議員十五名と公民館三名が参加して区の三役を中心として会議を進めて参りますが、時は金なりと云われておりますので時間正確に始まり本論に直ちに入り、また質問等発言は簡潔に、意見は集中的に出すように心掛けてまいりました。

会議は毎月の定例会が十日前後に召集される他に重要な議決事や相談の場合も行なわれます。町の区長会の報告には町に直結した事

切って別建物とする事で消防施設を最少限で認可されました。区有地裁判については来る十二月二日に高裁に於て証人尋問がなされる予定であります。

最後になりましたが代議員始め各委員の任期が近づいてまいりました。退任される皆様大変御苦勞様でした。それぞれ任期中区の御尽力下され有難うございました心から御礼申上ります。

業で区に關係する道路・水路の改良、その他関連する仕事や情報に始まり部落へ依頼される事も多く常会長を通じて一般に協力して頂く事項も数多く、加えて区独自の事業も沢山あり代議員を兼ねる部落長は御苦勞で多忙であります。

二カ年間の二、三の仕事を取返って見ますと区三役の改選や公民館長・副・主事の選任には選挙管理を致しますが、昨年は十月区役、十二月は公民館を行いました。今年三月には区の運営規定の検討をし円滑な運営が出来得る様に一部

を改訂しました。また萩山神社の式年祭ではそれぞれの持場で協力致しました。四月には下市田区の補助規定を委員会が審議して消防施設器具並に維持管理に關する補助金

交付規定と道路河川環境整備補助金交付規定を決定しました。区及公民館、萩山神社の予算決算中間決算の議決については以前は常会長が行なっていたものが、規定により代議員会で議決しております。

尚公民館で行う事業や神社の行事等も協力しております。以上任務についての一部を記しましたが今後の課題も多く、また

昭和61年度下市田区コミュニティ事業実施状況 (61.12.1 現在)

下市田公民館

	事業名	実施月日	場所	出場人員	予算(円)	実施額(円)
実施済み	下市田区 夏祭り納涼盆踊大会	61. 8. 2	下市田保育園	800人	178	180
	“ 教養講演会	61. 7. 13	下市田公民館	160	80	73
	一 区 秋期運動会	61.10.26	高森南小学校	550	450	405
	二 区 夏期スポーツ大会	61. 7. 6	二区多目的運動広場	170	70	115
	三 区 三区体育祭	61. 8. 31	高森中学校	360	210	273
	四 区 四区部落体育大会	61. 8. 24	“	150	120	122
	“ 四区映画の夕	61.10.25	四区生活センター	150	50	52
	五 区 五区スポーツ大会	61. 9. 7	高森南小学校	193	202	194
今後実施の	六 区 部落コミュニティ懇談会	61.6.18~ 61.6.22	出砂原地区館	200	36	87
	“ 野外カラオケ大会	61. 8. 10	“ 前広場	230	123	272
	二 区 町内を知る集い				200	
	三 区 伝統行事の伝承				50	
	六 区 講演会				50	
	計 13				1,819	



お願い申し上げます。

下市田の区、常会について (二)

田 戸 純 市

二区は北は一区、東は六区、西は三区、南は天竜川に囲まれた集落で、共励会である。従って以前は、総て常会の頭に共励が付いていて、大別して北部・中部南部に別れていた。

共励北部西、共励北部東、共励中部西、共励中部東、共励南部の五常会であった。共励南部だけは、西・東の別がなかった。

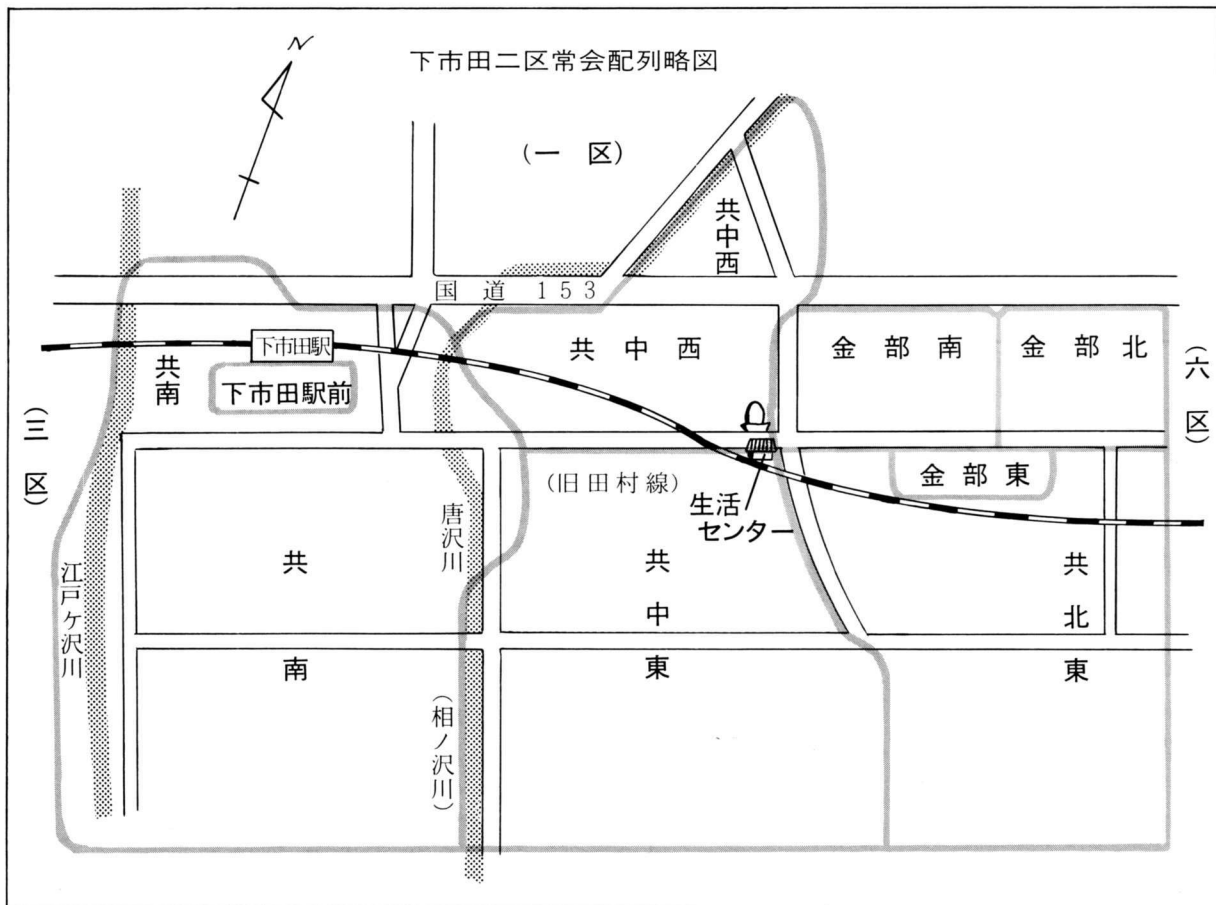
何故現在、共中西とか、共南とか云うか？それには次のような訳がある。今は故人になられたが、共南に福島民二さんと云う方が居て、役場で庶務係をされていた。当時私と同じ庁舎の中で、市田農協の庶務係をしていた。福島さんは能筆家で筆字の上手な方であった。それに比べて私は若輩で、まことに字が下手で困った。昭和二十五、六年頃までは、常会への通知は、封筒の表書は総て毛筆書で前書のように、共励中部東とか、共励北部西とか、書かなくてはならなかったのだ。

大変苦勞したものである。ことさらに字の下手な者は閉口であった。そんなとき、一計を案じ、毎日のことだから、印判を作ったらどうだろうと思ひ立ち、「役場と農協で経費折半で共同で判を作ったらどうか」と福島さんに相談したところ「それは良いが、一字幾らと相当な金額になるぞ」と云われ、考えた揚句、「最少圧縮形にして、然も一見常会の名称が判るようにしたらどうか」と云うことで「それでは委すから案を作って見よ」と云われ、字数を最少限にして、共中東、共南、共北東等として、福島さんのOKを得て、全村（旧市田村）今のようになつてもっとも新設常会は別だが、呼称に変わって印判が出来、役場・農協で共用して至極便利になつたものである。

当時役場と農協に公使さんが居て、通知を配ってくれていたが、「一見して常会が判るようになってお陰だ」と云われたものだ。

それにしても符号のようになつて今日通用していることに、時々罪のようなものを感ずることがある。最近になつて共中西が金部北と金部南に別れ、金部南の東国鉄飯田線寄りに住宅団地が出来て、金部東と云う新設常会出来た。また共南は四隣組が一常会で大きかつたが、六十一年一月下市田駅周辺が別れて、下市田駅前常会が独立した。二区の地区内には県の農事試験場組合製糸、「市」市田館（現在の農業倉庫、ライスセンターあたり）があつたが今は建物の一部、門柱などが僅かに昔日の面影を残している。

下市田二区常会配列略図



萩山神社ものがたり

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{x}} \right) = \frac{\partial L}{\partial x} \quad (8)$$

—「七・五・三の祝」について—

伊 谷 唯 介



「七・五・三の祝」とはどういうわけがあるのかまた、

「七・五・三のお祝」はどうしてもしなくてはならないものであるのか。などと云うご質問やご意見を承ることがある。

この「七・五・三」についてはいろいろの説があるが、県の神社庁教学部の説明によると現在行われているような形の「七・五・三」は案外新しく、その始まりは明治の初年頃であり、また普通の風習はある地方から始まって、それが順次中央へ伝わるものであるが、これは普通の風習とは逆に東京などの都会から始まって、地方にまで広がっている。

ったのだそうだ。

日本では昔から男女にも数え年の三才になると「髪置き」(かみおき)とか「櫛置き」(くしおき)とか云つて、始めて髪をのほす儀式をしたものであり、また、男の子は五才になると「袴着の祝」(はかまぎ)と云つて碁盤(ごばん)に立たせて初めて袴をつけさせたとか、また、女の子は七才になると「帯解」(おびとき)とか「紐直」(ひもなおし)とかの祝と云つて「本立」(ほんだち)の着物を着て本式の帯をしめさせたと云う。

このような儀式は鎌倉時代に武士の家で始まり、次第に一般の家庭でも行われ

るようになったと云われている。そして、その年令や祝の日取りも一定でなく、年令も七才・五才・三才ときめていたわけでなく、正月の吉日とか誕生日などによることが多かったと云われている。

それではなぜ「七・五・三の祝」を一応十一月十五日に定めてあるかと云うとこれまたいろいろの説があるが、その一つに五代将軍綱吉の子の徳松の祝をしたのが十一月十五日であるからとか、十一月十五日は陰陽道二十八宿の一つで、一年中で最上の日の一つであるからとかいろいろの説がある。各地の七・五・三祝の日を見ると十一月十五日を中心にその前後の日取りで実施しているようだ。

また、年令は満年令か数え年かなどこれまたいろいろの説があるが、現在はいくつの事を満年令でやっているから満年令で実施するのがよいだろうと思う。

そこで萩山神社で実施している「七・五・三の祝」であるが、従来は他町村の神社やお寺迄出掛けて行ってお供いをしてもらっていたが、われわれの産土様である萩山神社でこの祭事を行

実施するようにとの声が出て、十数年前から実施するようになったのである。

そして、その日程についてはその当時の区と氏子総代、それに保育園の関係者の三者が協議して決定した。そして日取りについては

十一月十五日前後の土曜日としその日の午前十時から区の主催にて下市田保育園白百合保育園の全園児を対象にして祭事を執行し、午後二時から是一般の該当児の希望者を対象に行うことになっているが、この日程もぼつぼつ検討してみる必要があるとの声も聞かれる

なお「七・五・三の祝」の記念写真を見ると、子供さん達はもちろん一張羅を着せてもらって、これまた一張羅の顔をさせられていることは云う迄もないことであるが、誰れも彼れもみんな「千歳飴」（ちとせあめ）の大きな袋をもってゐる。

さて、この「千歳飴」であるが、名前が「千歳飴」であって、大変おめでたい縁起物である。

これについて、大阪の役（えき）にて豊臣方は滅亡し、その残党に平野甚左エ門と云う武士があり、その

者が元和元年に大阪で水飴をつくって売出し、その後江戸へ下って浅草寺の境内で水飴を売り出した、これが「千歳飴」の始まりであると云われている。また、

云う名前がめでたいので
それにあやかるため皆買い
求めたのであり、「七・五
三の祝」の記念写真にはこ
の飴を持たなくては始まら
ない。

一方では江戸時代の有名な小説家に柳亭種彦と云う者あり、彼の書いた小説の中に「元禄・宝永の頃、江戸に七兵衛と云う飴売りありその飴を「千歳飴」或は、「寿食飴」といった。これが「千歳飴」の始めであると書いてあるが、さて、どちらが正しいかはっきりしない。

とにかく、「千歳飴」と

そもそも、この「七・五・三の祝」の発端は前述のよいうであって、「七才・五才・三才」と云う年令は子供達にとつて精神的にも肉体的にも大きな節目であると云われている。この節目を無事乗り越えての成長を感謝するの、今後の節目をも無事乗り越えられるように祈念するのが「七・五・三の祝」の主旨であろう。



木村政男

四区の萩山神社
氏子総代が交替

三区は追って決定します。

私と碁

北原 喜代治 (五区)

現在アマ四段格で打っておりますが、対局したことの強い方が下市田におられるのではないかと思います。

碁歴は長く十九才のとき

当時の勤め先東京神田の医学図書出版社の編集長で、戦後鹿児島県議会議員で物故された入鹿山嵩さんに手ほどきを受けました。

歌こそ我が命

渡辺 千代 (三区)

私は下市田一番です

小学校三年、私は母が口ずさむ、イチョウガエシニ、クロジユスカケテ。

こんな唄を、いつの間にか口ずさむようになり、此の頃から、唄が好きになりました。楽器が無いので、調子をとるのに、カンカラをたたき、近所を歌って廻ったのです。其の後、コーラスに入り、いろんな処でいろんな唄をうたってました。

独りで、ステージに上っ



た時などは、客席の人の顔が見えないほどあがってしまい、ガタガタふるえた



昭和四十五年、勤務先の下伊那地方事務所長・池田義宣さんが日本棋院の免許伝授審査資格をもっており初段免状を頂きました。

よくしたもので、その時から研究もし、碁会所にも行くようになり、昭和五十四年退職後は足繁く行っております。

県職員の団体戦の折り個人は全勝して嬉しかった思い出もありますが、その頃の県出納長で(後のテレビ信州社長)の小林司郎さんと二回対戦、二回共惜敗、また碁会所では長野県のアマタイトルを幾つもとっておられる、吉川文雄さんや和泉祥一さんと手合せしたこともありますが一度も勝っておりません。また区内では元山吹郵便局長で亡く

ものです。何度も何度も、場を踏むうちに、自信がつき、NHKカラオケ大会に出場、新しい友達も出来、好きな歌とのつながりが、私を大きくしてくれたような気がします。

もうよい齢ですが、時間さえあれば、何処へでも出る気がします。

歌こそ私の人生、唄こそ我が命と、あえて云わせていただきます。(本人記)

なられた平沢忠治さんとは何回も対局しましたがなかなか勝てない相手でした。負けた話ばかりですが、碁も人生と同じ七転八起で大体負けた碁はよく覚えていて、負けるたび段々強くなるものだと思っております。

碁の良さは、ギャンブル性の殆んどないこと。対局者と親しい友達になれること。十級の初心者も高段者も置碁で対等に対局出来ること。常に盤面全体を考えながら相手と交互に布石することによってその度に勝敗に係わる盤面が変化してゆくことに面白さがあります。

諸外国でも、碁はブームになっているそうです。言葉は判らなくても碁は打てます。

皆様も碁を覚えたら如何でしょうか。(本人記)

掛けて、好きな歌を思いきり唄っていきたくと思います。母の唄った、あの歌が「すみだ川」と知り、今日も又母の面影をしのびつつ口ずさむ私です。

歌こそ私の人生、唄こそ我が命と、あえて云わせていただきます。(本人記)

☆クラブ紹介☆

萩山陶芸クラブ

上沼 恒夫 (六区)

萩山陶芸クラブは昭和五十八年、当時の下市田高寿会の北沢久治会長及時の高寿会役員と会員の中から同好の希望者を募り県及町から『老人の生甲斐対策事業』として補助を受け、駒ヶ根市の木下隆保氏を講師として発足致しました。最初は会員も多かったのですが、それぞれの事情でやめる方が出来ましたが、現在には二十三名で窯の炎も益々盛大に続けております。六十年四月から飯田市毛賀の陶芸家小木曾宏光氏を先生にお願いしまして毎月三回指導を受けております。最近会員の製作や焼成の技術も非常に上達し、家事の余暇に作ったとは思えない様な製品が窯出し出来る様になりました。今では現在の窯では容量が小さくて作品の焼成が仲々間に合わないのが現況です。焼成出窯したものの全部が自分の手作りであり形が多少気に入らなくても、又釉薬の発色が心に入



史跡めぐりシリーズ (8)

坂牧城と坂牧氏

福島 光三郎

下市田の南端、新井原の一区画に現在、まき他数本の木の茂る杜がある。

古墳である。昔この杜を氏神としこの地域に城を構えた城主坂牧六之助義宗が住んで居た。

天正十三年の十二月末のある朝、城の南方、川幅が広く、瀬の浅い座光寺河原を騎馬で渡った武士の一群があった。この武士の群は松岡氏の出城である坂牧城を攻撃して来たのである。

座光寺次郎右衛門の密訴により、松岡のむほんを知った菅沼小大膳の一隊だった。この城は、四二〇米の段丘の上にあり、東側は切れて天竜川に臨み、北面は空堀で南方はゆるやかな丘陵となっていた。

この丘陵を、百数十騎の将兵がとりでを破って城内へ雪崩れこんだ。

城中の坂牧勢は、将兵一体となって応戦し、急を知った八十騎の面々も来援し

て大いに戦ったが、虚を突かれた坂牧氏また松岡勢は力つき敗れ去った。

この防戦で多くの武士が戦傷死し、六之助は勿論、本城に立籠るいとまもなく松岡貞利も逮捕されるにいたった。

坂牧城の戦いで戦死した五十余名の敵味方の死者は城内の一隅に埋められたと云うが、その場所に墓印の石一つなく、現在は柿の木が植えられている。

それは、今から約四百年前の天正十三年―一五八五年のことである。

伊那の名家として五百年間郊戸の庄を領有しその勢威を誇って居た松岡が、徳川に帰順し乍ら、豊臣を支

持の松本の小笠原と気脈を通じ、高遠城の攻略に参加したのである。兵を三峯川近く迄向けた時、小笠原の軍は、戦いに敗れ退却の途中であったため、松岡の軍は一戦も交えず引返したの

であった。当時松岡に対し反感を抱いていた下市田の洞に居住の座光寺次郎右衛門が、伊那郡司として知久城に居た菅沼に、松岡に逆心ありと密告したため、菅沼は時をおかず、松岡攻めの討手を繰り出したわけである。

召捕われた松岡貞利外八十騎の二十九名は一旦、知久城に拘留されたのち、駿府に護送された。

駿府取調べの後、一騎二騎の十数名は、釈放されて故郷に帰り、またある者は他国に流浪した。

駿府裁判の終る迄の三年間、松岡貞利他三騎より六騎の面々十名は、他郷にあって無聊をかこち、望郷の念に駆られたことだろう。

駿府の伊井屋敷で行なわれた、徳川家康の御前裁判には、勿論坂牧六之助は、一城の主として、主君貞利と

席を同じくした。改易となった松岡貞利は縁故のある伊井直政の保護を受けることとなり、坂牧六之助も扈從した。

以降坂牧は直政のお國替に伴い松岡と苦楽を共にした。群馬の箕輪城へ、また慶長三年より五年迄は高崎城へと。

伊井直政の死亡によりその子の直継の築城した彦根城にまで移ったかどうか。坂牧六之助の子次郎兵衛が長男の忠兵衛と共に、故郷の市田の郷へ帰る迄の消息はさだかでない。

坂牧忠兵衛は、帰郷はしたもの、以前は己れの居城であった新井原一帯の地域は既に林一郎兵衛の所有するところとなって居た。

明暦年間―一六五五―生田の部奈より移住した一郎兵衛の所有となり坂牧の氏神としていた杜も一畝二



史跡坂牧城

○歩―林のものとなって居たのである。

坂牧次郎兵衛が故郷の地である市田に帰ったのは、正保の検地―一六四七―以降でその検地帳の屋敷の部に坂牧なるものがない。

忠兵衛の名は寛文二年の検地帳の屋敷の部にながれ居住となっている。

正保の検地の折に松岡八十騎のうちの者で既に屋敷二畝余を持ち、田五反、畑五反を耕作し生計をたてて居るものが居た。

忠兵衛は屋敷をながれより南田―おかいじ―に移しそれより現在地の道寿に移っている。

坂牧家では毎年正月の十四日に御飯を焚いたあと、大豆の煮たものをわらずこに包み紅を添え鬼木と共に旧坂牧城の東端段丘の下の淵に供えている。

これは、昔城中で下女の馬の飼いが悪いと馬と共に下女を淵に投げ入れたその祟りをまぬがれるためとされている。

現在坂牧一統の氏神は、城のあった地籍の東端にある。

(註)

①故小川仲太郎談
高森町史上巻

正保検地帳四年一六四七
寛文検地帳二年一六六二

坂牧家系譜

坂牧次郎兵衛―忠兵衛―

惣右エ門―彦右衛門―

総百姓 庄屋

文右衛門―惣左衛門―

弥惣治―

庄屋

―弥惣治―音作―壹次郎

―清治郎―義夫



下市田公民館の
消防施設が
設置される

下市田区ではかねてより消防署から指摘されていた公民館の消防施設が設置され、去る九月十二日消防署の検査が終了した。

コントロール設備は区事務所内へ消火器は粉末式で体育館と一階廊下へ、煙探知器は各部屋ごと、また非常誘導灯や二階には非常用縄梯子(二ツ)も設置されすべて規準に合致した施設となった。区民のみならずには折にふれ操作や非常時の対処方法をPRして参ります。

★ 随想 ★

今昔

木下 豊(三区)

終戦も間近い頃だった。田村の中段に生れた私は二十才近くも年のはなれた姉が牛牧へ嫁いでいたので、親に頼まれては時々お使いに行ってきた。田村から明神橋を渡って出砂原・北ノ原を通り唐沢洞から南小学校のところへ出て牛牧線を登って牛牧のお宮の上までの道則である。時間にして子供の足で往復三時間余りかかった。しかも小さい体へ大風呂敷で包んだ荷物をしっかりと背負って歩く。時には歯を喰いしばって歩いた。今もあの道を通る度に懐かしく思い出す。

当時とすれば此の辺ではそれが当然で親も子も当り前だと思っていた。昨今ならどうでしょう。親が子供に頼むどころか子供をクルマに乗せてアッという間に行ってきたでしょう。これが今日の常識であるとするものだと改めて思う。

学校の勉強だけでも仲々大変だろうに小さい子供達までが塾に通う。我々から

見れば気の毒の様にさえ見える。今の子供達の頭で学ぶ勉強には感心するが、体で実感として学びとる勉強は一体、何時、どこで、どんな形でやるのかな。又、誰がそれをさせるのかな。と考える今日この頃である。

×××

想い出

婦人会出砂原支会長

下平 高子

婦人会出砂原支会長と、

大変なお役をお受けして思うに、地域婦人は、自主団体であり、命令されて行く会ではない事、地域に於ける婦人会でもあります。

今の社会には、地域婦人会が、どこにも出席してお手伝いし、出砂原部落の敬老会の問題など、部落と出砂原婦人会とが協賛で行って良かったと思う。また納涼大会には、下市田保育園の広場に於て盆踊り大会を、下

勉強し、また遊び、時には奉仕活動もやろうと言う考えで今年三月に、下市田に住む男女全ての青年壮年を対象に発足しました。夏に会員の親睦の意味でソフトボール会と焼肉パーティを行い、秋には何か意義のあることをやろうと三ヶ日のみかん狩りと名古屋にある電気科学館の見学をバス満員の参加者で行いました。また冬には大画面のテレビでビデオの名画観賞を計画

しております。他にも公民館の納涼祭には出店をして協力参加をしました。会員の中から、こんな事をやりたいという意見がたくさん出て来ますが、それを具体的になかたちにするのが大変です。しかし会員はもちろん、それ以外の人達も含め

下市田

青壮親和会の紹介

木村 善 徳(四区)

出て来ますが、それを具体的になかたちにするのが大変です。しかし会員はもちろん、それ以外の人達も含め

波の輪の様に知人から知人へ交流が広がっていく、そんな石に親和会がなれたら幸いです。今年が一年目でも何もかもが暗中模索ですが五年、十年と永く続く会にして伝統を作り上げていきたいと全員張り切っております。現在会員は四十数名ですが、あなたも参加してみませんか。



市田婦人会の皆様といっしょにできた事、出砂原の灯籠流しも、下市田公民館長、下市田婦人会、高森禁煙会の皆様の協力がありまして盛大に出来ましたことを、心よりお礼申しあげます。これからも、このように交流し合って行きたいと思ひます。下市田区、公民館の敬老会に、皆様をお招きした時など、出砂原部落よりマイクロバスも出して頂き、敬老会の皆様に嬉んで戴く事が出来ました。アトラクションの部で、区民の皆様の踊り、民謡、唄う民謡、茶の湯、盆栽、書道其の他色々、出品物が盛り沢山で、大変に目を楽しませて頂きました。十一月

五日、高森町敬老祭が、福祉センター大ホールにて、盛大に行われました。この時も、各種団体の皆さん出席して、老人の皆様に、どのようにして喜んで戴くか私共は、センターの玄関にてお迎えし、履物をビニール袋に入れて、保育園児の手作りのリボンを一人一人付けて上げる事、プログラム、お弁当を二階の大ホールの入口で渡す方は、日赤奉仕団の方達でした。老人の皆様も大変に喜んで、余興を終りまで見ておられました。このようにして私達の仕事も過ぎていくかわら、反省しつつ、私の文を終らせて頂きます。



小中学生の作文

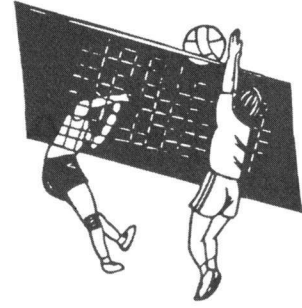
部活動

一区 中三 久保田 大 輔

中体連が終わってから、もう何ヶ月もたってしまいました。しかし、部活動で学んだことを忘れてはいません。

何気なく男子バレー部に入部してから、中体連南信大会で敗北するまで、本当に厳しい練習の毎日でした。一年のころは体力作りがおもでしたが、僕はこれが嫌いでした。苦しいからです。この時もっと頑張ればもっとすばらしいプレーができたのに、と後悔したのは、

また、試合などを通じてねばりや根性というものも知りました。きわどい試合をのりこえてこれたのは、これらのおかげだろうと思います。



このように基礎の大切さ、ねばりや根性、そしてチームワークのすばらしさなど部活動で知った事は多くあります。そしてこれらは、苦しい時に自分を励ましてくれたり、しなければいけないことを怠っている時に自分を叱ってくれたりしています。これら部活動で知ったことを、さらに日々の生活に生かしていきたいと思っています。

そして、部活動の思い出を一生忘れないようにしたいと思っています。

郡市連合音楽会

二区 小六 宮外 陽子



— バンタン —
by. はやとぎん

(毎号、皆さんのイラストを載せたいと思います。どしどしお寄せ下さい)
編集部

何回も練習して、校内音楽会、支会音楽会とかさねて、ついに郡市連合音楽会の日がきた。

郡市連合音楽会への出場は今年で二回目。

今年が一番最後にうたう「とり」と言う事だった。

「とり」と言う事だったので、昨年とはどこことなくちがった感じがした音楽会でした。

音楽会は、プログラムの一番からどんなはじまっていきました。

最後なので、ずうっとあの気がしていた。

カラオケ大会

入賞者

六区 福沢昌治
来竹桃
努力賞
五区 西川宗一
涙をふいて

編集後記

今年も余すところわずかとなりました。

区報発行は今回で第八回目で最後の発行となりました。

この間区民の皆さんから投稿をいただきご協力に感謝しております。

どうか今後とも区内の情報、コミュニケーション源としてますます発展することを期待しています。



熱演賞

約 東

「25番、高森南小学校」

その声で、座席にたち前の方から、ステージへあがった。歌は「五羽のつばめ」

です。歌がはじまり、畑中先生の言っていた、ニコニコ顔、つばめのことを思い

うかべて、と言うことを思いつばめのことは、一生懸命